

## 二人のソクラテス

立花幸司

本稿は、2019年9月14日の発表用に事前に配付された原稿と当日追加で配付された原稿を合わせた記録である。当日の原稿の時点でも未完成であったが、会場からの有益な質問や、その後に自身で検討をつづけたいまの時点でも、残念ながら完成していない<sup>1</sup>。そこで、本稿については心苦しくも不掲載としたい旨を編集委員の先生方に相談したが、本論集はいわゆる独立した雑誌に掲載される公刊論文（publication）ではなく、会の記録（record）を残すためのものであるという御返答を頂戴し、その言葉に後押ししていただくかたちで、公刊論文ではなく記録としてであればと思いなおし、当日の資料を再掲するものである。当日の会場での質疑はいずれも有り難いものであり、現在も検討中のこの議論については、自分なりの完成をみるかたちで、論文として公刊することができれば、当日の質疑や本会そのものに対して、僅かながら恩返しができるのではと考える<sup>2</sup>。

### 1. 偉大なるソクラテス

ソクラテスが、釈迦、キリスト、孔子とならぶ四聖の一人として偉大な人間と称えられていることは、一般教養という意味で「常識」の一つといえる<sup>3</sup>。では、そのソクラテスの偉大さとは何なのか。やはり一般教養的な意味でその答えとして挙げられるのは、なによりもまず、彼が極めて、そして終生哲学的であったこと（またそれを敷衍して、哲学の祖とされていること）であろう。「哲学的である」とはどういうことかについては哲学研究者の誰もが一家言をもつだろうが、少なくともソクラテスにおいては、彼の生き方として理解することができる。それは、「だれもソクラテスより知恵ある者はいない」というアポロンの神託に貫かれ、「無知の知」という自覚のもとに「知を求めること (φιλοσοφείν)」——哲学すること——への途を歩む彼の生き方である。

---

<sup>1</sup> 当日会場で質問をしてくださった、荻野弘之氏、納富信留氏、高橋久一郎氏、今井知正氏、栗原裕次氏、中畑正志氏に、またその他の機会にコメントを下された方々に、心より御礼申し上げます。

<sup>2</sup> それゆえまた、本記録については、執筆者の許諾を得ない引用や言及はお控えいただきたい。他方で、私がここで提示したアイデアについて、メールであれ対面であれ私的にコメントして下さる方がいれば大歓迎である。

<sup>3</sup> しかし、どの思想家がどのような理由で四聖に値するのかは、必ずしも明確ではない。たとえば井上円了はキリストの代わりにカントを四聖に入れ、またソクラテスについても、哲学の祖としてではない独自の理由から四聖の一人としている（柴田 2013）。

では、ソクラテスが身をもって示した「知を求める生き方」とはどのような生き方だったのか。この問いは、『国家』第一巻の最後（352d 以下）において、人間はいかに生きるべきかという問いのかたちで提示され、その答えは二段階の議論から構成される機能論法を通じて与えられる。第一段階では、X の機能（はたらき）とは「ただそれを用いることによってのみなしうるような、あるいは、それを用いることによって最も善くなしうるような仕事」（352e）のことであると論じられる<sup>4</sup>。ここから、たとえば、「目」の機能は「見ること」であり、「耳」の機能は「聞くこと」とであるとされる。第二段階では、「それぞれのものには、それが本来果すべき〈はたらき〉が定まっているのに対応して、〈徳〉（優秀性）というものもある」（353b）ことが論じられ、各機能の発揮に際して善し悪しという程度差が認められることが明らかにされる。たとえば、徳のある目は「よく見ること」ができ、悪徳をそなえた目は「盲目性」をもつとされる。つまり、「それぞれの〈はたらき〉をもっているものは、自分に固有の〈徳〉（優秀性）」によってこそ、みずからの〈はたらき〉を立派に果し、逆に〈悪徳〉（劣悪性）によって拙劣に果す」（353c）のである。

この二段階からなる機能論法を用いて、人はいかに生きるべきかについても明らかにされる。第一段階で、「魂」の機能とは何かが問われ、その機能は「生きること」であることが導かれる。そして第二段階で、「生きる」という魂の機能の善し悪しに焦点が当てられ、徳のある魂をもつことで、人は善く生きることができると導かれる<sup>5</sup>。魂の徳とは「正しさ」であること（それゆえまた、魂の悪徳とは「不正」であること）が別の問答を通じてすでに認められていたことから（350c-d）、「正しい魂や正しい人間は善く生き、不正な人間は劣悪に生きる」ことが、「したがって、正しい人は幸福であり、不正な人はみじめである」ことが導かれる（353e-354a）。

善く生きることと幸福に生きることは同じことなのか、魂の徳とは正しさなのか、魂の機能とは生きることなのかなど、検討すべき論点が多い。しかし、これらは本発表の焦点ではないので、受け入れることとし、いますこしソクラテスの「生き方」を素描しておこう。

さて、正しさという魂の徳をそなえることが善く生きることであるとして、件の徳を魂にそなわらせ善く生きるようになるにはどのようにすればよいのか。ソクラテスの考えに

---

<sup>4</sup> 本発表では、プラトンとアリストテレスからの引用はそれぞれ、『プラトン全集』と『新版アリストテレス全集』からのものである（ただし、『形而上学』については新版はまだ未刊行のため、旧版の『アリストテレス全集』から引用した）。引用に際しては、それぞれステファヌス数とベッカー数を記載し、訳者名については失礼ながら省略させていただいた。

<sup>5</sup> 名詞としての「徳」と形容詞としての「善い」の関係については、アリストテレスが「徳をもつことによって人は善良だと語られるのであるが、徳から派生名的な仕方ですなわち「～は有徳だ」という仕方ですなわち」そう語られてはいない」と述べている（『カテゴリー論』8, 10b7-9）。ここでのプラトンもまた、「魂の徳（ἀρετήν [...] ψυχῆς）」（353d11）のことを「すぐれた魂（ἀγαθὴν [ψυχῆν]）」（353e5）と言い換えており、「徳」の形容詞形として「善い」を用いていることがうかがえる。

よれば、それは正しさという徳の「何であるか（定義）」を知ることによってである（『ゴルギアス』460b）。ここでもまた、なぜ「或る事柄の定義を知ること」が「その定義に適った生き方ができるようになること」と等値なのか疑問が生じる。同様の疑問を投げかけながらではあるが、アリストテレスもまたソクラテスのこうした考え方に言及している。

老ソクラテスは、徳を認識することが〔人間的生の〕目的であると考え〔…〕それゆえ徳とは何であるかを探究したが、徳がどのようにして生じるのか、また何から生じるのかを探究しなかった。〔…〕だがしかし、少なくとも徳については、それが何であるかを知ることが最も尊いのではなく、それが何から生じるのかを知ることが最も尊いのである。（『エウデモス倫理学』15, 1216b2-21）

「知ること」と「(知った事柄に沿って) 生きること」の関係は、(今回のセミナーの主題でもある) パイディアを検討する上で最も重要な論点の一つであると考えられるが、やはり本発表の焦点ではないため、この点も受け入れることとして、ここまでの素描から確認できるソクラテスの「生き方」について次のようにまとめておこう。まず、人はいかに生きるべきかという根幹の問いに対しては、善く生きるべきであると答える。ついで、善い生き方とは何であるかと問えば、それは、〈自らの魂が正しさという徳を備えて生きる生き方〉であると答える。そして、魂が正しさという徳を備えるためにはどうすればよいのかと問えば、正しさの定義を知ればよいと答える。こうして、ソクラテスによれば、〈正しさという徳を知ろうとして生きること〉こそが、人が生きるべき生き方となる。そしてこの生き方は、(正しさにかんする) 知を求める (*φιλοσοφείν*) 生き方であるから、文字通り、哲学する (*φιλοσοφείν*) という生き方となる。したがって、人は哲学して生きるべきなのだということになる。こうして、ソクラテスが実践した生き方とは、善く生きようとして徳の何であるかを探究するという、哲学する人生だったのである。

徳を知る方策として、ソクラテスは「問答 (*διαλεκτική*)」を選んだ。問答とは「正義や幸福といった生き方の根本に関わる問題についての真理探究の方法」として、「相手の説の論駁 (*ἐλεγχος*)」を行おうとするがゆえに、「対話する同士が『知識』と『好意』と『率直さ』とを備え〔…〕対面を気にしたり、相手への中途半端な配慮があったりしてはならない」ものとされる(荻野 2016, 9; 『ゴルギアス』487a)。ソクラテスにとって、哲学的に生きることは、善く生きるために、徳の何であるかを知ろうとして、そうした問答をしつづけること——そしておそらく副次的には、その問答によってほかの人々にもまた「無知の知」を自覚させ自らと同じ途を辿らせること——に他ならなかった。

そのように哲学して生きることこそが、自らの魂に徳を備えさせようとするという点で自らの魂を気遣うことに他ならないと信じた彼は「わたしの息のつづくかぎり、わたしにそれができるかぎり、決して知を愛し求めること(哲学)を止めないだろう」と語り、

そして実際にそのように生き、死んだ（『ソクラテスの弁明』 29d）。

そのように生ききったソクラテスの姿は、『ソクラテスの弁明』『クリトン』そして、『パイドン』において鮮やかに描かれている。本発表では、この三つの対話篇のなかでも『クリトン』に、そしてとりわけその対話の或る点に、着目する。その点とはすなわち、ソクラテスとクリトンのあいだでなされている問答が、〈実際に死ぬことを選択する〉ということを主題とした対話であるという点である<sup>6</sup>。『クリトン』では、同郷にして同い年であり、長年の親しい友人であるクリトンが獄中のソクラテスを訪ねる。そして、ソクラテスは無実であり、そして脱獄の手はずも整えているのだから、是非とも脱獄してほしいとソクラテス自身に懇願する。それに対してソクラテスは、善く生きるためにはそうすべきではないのだということを、理由 (x) を挙げながら、問答を通じて、クリトンに納得させる。獄中においてソクラテスがクリトンに語った（という筋書きでプラトンが描いたところの、ソクラテスが死を選ぶ根拠となった）「死ぬべき理由 x」とは何だったのか。たとえば、クセノフォンは、『ソクラテスの思い出』のなかで、ソクラテスが死を選んだ理由 x を遵法精神と理解したうえで以下のように述べている。

正しさについても、彼は持てる見解を隠すことなく、実際場でそれを示した。すなわち、私的には誰とでも法にかない、人の役に立つような仕方で付き合い、また公的には、法の定めた事柄について、国民生活の場でも軍事行動にあっても、支配の任にある者たちに服従し、規律ある者として他に立ち勝っていたし、また民会において議長になったときには、民衆が違法な仕方で投票を行うことを許さず、他のどんな人間でも持ちこたえられないと思われるような民衆の激しい勢いにも、法を守って反対を押し通した。また三十人独裁政権が彼に法に反したことを命じたときにも、それに従おうとしなかった。すなわち、若者たちと対話を交わすなど彼らが布令を出したときにもそうだったし、また彼と他にも何人かに市民のうちのある者を処刑するために連行してくるよう彼らが命じたときにも、彼に対する命令が法に反しているという理由で、彼だけがそれに従わなかったのである。またメレトスによる告発の被告に立たされたときにも、他の者たちは法廷において、法に反した仕方で裁判委員たちの温情を狙った話し方をしたり、媚びへつらったり、哀願したりするのが常習的で、そうしたやり口によって多数の者がしばしば裁判委員から無罪放免されているのだが、かのソクラテスは、法廷において法に反した、それらの常習行為を何一つ行おうとしなかった。もしほどほどになりそうしたことを何かしておけば、裁判委員から容易に無罪放免されていたであろうに、彼は法に反して生きることよりも、むしろ法を順守

---

<sup>6</sup> 「死」について扱っているという点で『パイドン』との共通点は見られるが、しかしこの、死なないという選択肢があるなかで死ぬことを選ぶことについての是非を話題にしているという点で、死ぬことから免れえない処刑当日の姿を描いた『パイドン』とは、重要な違いがあると考えられる。

して死ぬことを選んだのである。(クセノフォン『ソクラテスの思い出』4.4.1-4.4.4)

クセノフォン以来さまざまな研究者が論じてきた遵法精神という理由が、彼が死を選ぶことを正当化するうえでどれほど説得力を持つのかについては、議論がある。たとえば、この遵法精神は国家への強い服従を要請する「親子モデル」に基づいており、このモデルに依拠したソクラテスの議論は「単に我々にとってはその議論は説得的ではないというにすぎない」とする議論もある(高橋 1991, 13)。ソクラテスの主張を支える理由  $x$  の解釈をめぐる問題の背景には、正しくあることと法に従うことが同一のことなのか否かという問題がある。しかし、本発表は、問題となっている理由  $x$  の解釈については立ち入らない。むしろ、 $x$  のままとして、解釈者ごとに(あるいはさらに、いわゆる「ソクラテス文学(οἱ Σωκρατικοὶ λόγοι)」の作者ごとにできえ)自らの解釈が入れられるようにしておこう。なぜなら、そうすることで、ここでの発表にとって重要な点が逆に浮き彫りになるからである。すなわち、本発表が注目しているのは、ソクラテスには、その状況で死を選ぶことが正しいことだと考える或る理由  $x$  があり、かつその理由  $x$  を挙げて論じることで脱獄しないで死ぬという自らの選択をクリトンに対して説得することに成功した、そうした理由  $x$  が存在する、ということだからである。このような観点から『クリトン』篇をみると、クリトンとの問答におけるソクラテスの主張を次のように定式化することができる。

【定式されたソクラテスの主張  $\alpha$ 】

- P1 : 全ての人間は、ただ生きるのではなく、善く生きるべきである。
- P2 : 善く生きるためには、この状況  $y$  では、理由  $x$  により、無実であっても脱獄せずに死ぬべきである。
- P3 : 私ソクラテスは人間である
- C : 私は、脱獄せずに死ぬべきである。

状況  $y$  の明確化については後に行うこととして、ここでは、主張  $\alpha$  をおこなうことで死へと赴くソクラテスの様子について確認しておこう。処刑前々日の対話と思われる『クリトン』では、クリトンはソクラテスが眠れないほどの辛い境遇にいると考えながら訪問したのに、ソクラテス自身が獄中で気持ちよさそうに眠っているのを見て感心するという、ソクラテスが置かれた状況の理解に関して明確なコントラストが描かれている(43b)。このコントラストは、熱心に脱獄を勧めるクリトンに対して、終始一貫して平生な様子で対話を進めるソクラテスとしても同様のコントラストが描かれている。また、処刑当日の様子を描いた『パイドン』では、集まった仲間たちとの問答が、パイドンの報告というかたちで描かれているが、そこでのソクラテスもまた、感情の起伏を抑えきれない対話者たちに対して、当のソクラテス本人は、自らの死を平生な気持ちで受け入れ幸福な様子が語り口にも態度にも伺える。このコントラストは、たとえば次の一節に明確にうかがえる。

その場に居あわせて、なんとも不思議な気持にわたしはおそわれたのでした。親しいひとの死に立ち合っているというのに、悼ましいと思う気持は、わたしにはおこらなかつたのです。なぜって、あの方は倅せであるように、エケクラテス、わたしにははっきり思えたからです。その様子にもその言葉にも。まことに、なんという自若とした態度で、気高くも死につかれたことでしょう。わたしはそこで思うのでした。この方なら、ハデスに赴かれるのも、神の特別のはからい、つまりは神のかかわりによるにちがいない。そしてひとたび、かしこに到られたならば、倅せにすごされるであろうことは、もしそれがひとにかなうことならば、この方には必定なのだ、と。じじつ、そのようなわけで、悲しみの場に立ち合った者なら、とうぜん感じてよさそうな、悼ましいと思う気持は、わたしにはまったくおこらなかつたのです。しかしだからといって、いつものように知を求めるとなみのうちに時を過ごしているのだと思っても——じじつ、そのときにもそのような談論がかわされたのですが——、その悦びは日ごろのものではありませんでした。いやまったく、なにか奇妙な感情が自分をとらえつづけていたのです。よろこびはあっても、あの方がまもなくなくなられるのかと思うと、それに苦痛が混じり合い、いまだかつて経験したこともない、なにか混淆した気持が、わたしには現われてくるのでした。そしてその気持は、その場にいたわたしたちすべてのものだったともいえましょう。あるときには笑っているかと思うと、ときにはまたすぐに涙をながしたりしましてね。（『パイドン』 58e-59a（傍点は訳者による））

心持ちのこうしたコントラストが生じるのは、一方でソクラテスは、当該の理由  $x$  をいわば自信を持って保持しているのに対して、対話相手たちは、そうした理由  $x$  をまったく持っていないか、あるいは持っているとしてもいわばまだその確信度が足りていないからであろう。さらなる理由を加えることもできる。たとえば、『パイドン』篇でのソクラテスのように、死は「魂の、肉体からの解放と分離（λύσις καὶ χωρισμὸς ψυχῆς ἀπο σώματος）」（67d4-5）であり、分離解放された魂は不死なものとして純粹に知的な認識が可能となる、という理由である。この理由を加えることで、死に対して恐怖心をもたない心持ちが増進される可能性は、たしかにある。しかし、この発表では、「魂の不死」という論点は、心持ちのコントラストにとっては付加的な条件と理解し、理由  $x$  の把握の有無こそが主たる条件だとすることにする。なぜなら、魂の不死がまったく話題とならない『クリトン』篇において、このコントラストが生じているからである<sup>7</sup>。そこで、心持ちにかんするこのコントラストを以下のように定式化しておこう。

<sup>7</sup> また、たとえば納富（2017 第一章）が指摘するように、「魂の不死」（およびその理論的根拠を与えるイデア論）をソクラテス自身が信じていたとする根拠もまた明確ではない。

【定式されたソクラテスの心持ち $\beta$ 】

P1：状況 $y$ において死と向き合うことは、理由 $x$ を持たない限り、平生ではいられない。

P2：当初から理由 $x$ を十分保持しているのはソクラテスだけである。

C：ソクラテスだけが、状況 $y$ において、死に直面して平生としていられる。

無実の罪で投獄されたソクラテスであったが、彼は、文字通り息のつづくかぎり、善く生きることだけを考え問答し、みずからの立場を唱え、実践した（主張 $\alpha$ ）。しかも、それを死ぬ間際まで平生とした心持ちでおこなった（心持ち $\beta$ ）。主張 $\alpha$ と心持ち $\beta$ を兼ね備えたソクラテスのこの生き様が、当時の、そして現代にいたるまで多くの哲学者たちの胸をうつ「美談」となったこと、そして哲学史における事件であったことは間違いないだろう<sup>8</sup>。

## 2. もう一人のソクラテス

このソクラテスの「美談」を支えている彼の生き方・哲学観には、もう一つの顔がある。その顔は「息のつづくかぎり、わたしにそれができるかぎり」哲学することを止めはしないと語っていたソクラテスの、その直後の次の発言にみることができる。

わたしは諸君に勧告し、いつ誰に出会っても、諸君に指摘することを止めないだろう。そしてその時のわたしの言葉は、いつもの言葉と変りはしない。（『ソクラテスの弁明』29d）。

「誰に出会っても」とはどういうことだろうか。善く生きることを求める彼の問答、そしてそれを通じた哲学的な生き方は、ソクラテス本人にだけ向けられたものでもなければ、彼の仲間たちだけに向けられたものでもない。むしろ、およそ人間一般に向けられる普遍的なものであろう<sup>9</sup>。実際、プラトンが描く対話篇では、ソクラテスの仲間たちではない人たちとの問答が多く登場する。そうした問答が描かれた背景には、吟味され到達されるはずの知の内容は、誰にとっても当てはまる、普遍的な定義のかたちで与えられるものとソクラテスが考えていたからであろう<sup>10</sup>。さらに、ソクラテスは、この問答を「いつ

<sup>8</sup> 当時のインパクトについては、彼の死後に彼を主人公として執筆されたソクラテス文学に属する著作群（やその断片）に窺い知ることができる。

<sup>9</sup> この意味で、ソクラテスが哲学者という生き方を「人間だれでもそうあるべき生き方を意図していた」とする納富（2015 第一章、傍点は原著者による）の見解に同意する。

<sup>10</sup> ソクラテスは「倫理的方面の事柄についてはこれを事としたが、自然の全体についてはなんのかえりみるところもなく、そしてこの方面の事柄においてはそこに普遍的なものを

[...] 出会っても」開始するという。この背景ははっきりとはしないが、一つの理由としては「吟味のない生活は、人間の生きる生活ではない」とソクラテスが考えていたことを挙げることができる（『ソクラテスの弁明』38a）。自らの、そしてまた他人の人生を生きるに値するものとするためには、常に問答を通じて吟味しなければならないのである。問答の発動条件に関するソクラテスのこの考え方を次のようにまとめておこう。

**【ソクラテスの問答の発動条件  $\gamma$ 】**

善く生きるためには、問答は、誰に対しても、どのような状況でも行うべきである。

そうであるならば、つぎのような事態が生じていたら、ソクラテスはどうするのであろうか。次のような思考実験を試みよう。

**【思考実験 1】**

ソクラテスとクリトンの立場を入れ替えてみよう。ソクラテスと親しくしていたクリトンは、不敬罪で訴えられる。訴えられたクリトンは、弁明が上手くいかず、結果、死刑判決を受ける。投獄されたクリトンのところに、竹馬の友であるソクラテスが尋ねてくる。クリトンは言う、「私は無実であり、そして脱獄の手段があるのだから、脱獄を手伝ってほしい」。さて、ソクラテスは、なんと言うのであろうか。

問答の発動条件  $\gamma$  により、ソクラテスの問答はこの状況でも開始されることになる。その結果、ソクラテスは主張  $\alpha$  を唱えることになるが、その際、次のような修正されたバージョンとなる可能性がある。

**【修正されたソクラテスの主張  $\alpha^*$ 】**

P1 : 全ての人間は、ただ生きるのではなく、善く生きるべきである。

P2 : 人間として善く生きるためには、この状況  $y^*$  では、理由  $x$  により、無実であつても脱獄せずに死ぬべきである。

P3\* : 君クリトンは人間である。

C\* : 君は、脱獄せずに死ぬべきである。

この思考実験で指定されている状況  $y^*$  は、オリジナルの状況  $y$  とどの程度相違しているのであろうか。この相違を確認するために、マッキーが提示した、道徳的判断の普遍化を検討するための三段階を援用しよう（Mackie 1977）。まず、第一段階として、ソクラテス

---

問い求め、また定義することに初めて思いをめぐらした人」だとされる（アリストテレス『形而上学』A6, 987b1-7）。



という人物とクリトンという人物の立場が入れ替わっている。このことは、少なくとも、主張  $\alpha$  / 主張  $\alpha^*$  の対象（被告）が数的に異なっていることである。第二段階として、この数的差異は、同時に、各被告の身体的状態や社会的地位といった立場の違いを含む。さらに第三段階として、そうした立場の違いだけでなく、各被告が辿った来歴や価値観などの考え方の違いがある場合には、そうした違いも含む。

こうした三段階の相違からなる状況  $y^*$  は、ソクラテスの観点からみて、道徳的に重要な点で状況  $y$  と異なるところがあるだろうか。もしあるとすれば、理由  $x$  に基づいた主張  $\alpha$ （主張  $\alpha^*$ ）を差し控える必要がありうる、ということになる。それでは、状況  $y^*$  のそれぞれの段階における相違が道徳的な意味をもつか検討しよう。まず、前提として、前節で確認したように、ソクラテスが探求していた知はすべての人間に当てはまる普遍的な内容をもつ。それゆえ、オリジナルの状況  $y$  においてソクラテスに当てはまる道徳的な判断が、単にそれが数的に異なるクリトンだからという理由で、状況  $y^*$  においてクリトンには当てはまらないということをソクラテスは認めないだろう。したがって、第一段階のソクラテスとクリトンという数的差異は、ソクラテスにとっては、道徳的には重要なものではないだろう。そして、単純に言って、同様の論法が第二段階と第三段階についても当てはまる。つまり、両者の身体的な状態の相違や社会的地位の違い、さらには来歴や考え方の違いといったものは、やはりソクラテスにとっては、自身の考えを提示することを差し控える理由とはならない。なぜなら、探求されているのは、およそ人間に当てはまる普遍的な事柄だからであり、ソクラテスが問答において提示している自らの考え（主張  $\alpha$  / 主張  $\alpha^*$ ）も、そうしたものであることを目指して、提示されているものだからである。

したがって、状況  $y^*$  は、ソクラテスにとっては、理由  $x$  に基づいて主張  $\alpha$  を差し控えるような、道徳的に意味のある相違点は状況  $y$  とのあいだにはない。それゆえ、 $C^*$  は、ソクラテスがソクラテスである限り、導かれる結論である。

では、この思考実験において、ソクラテスはどのような心持ちでクリトンに向かって死ぬよう説くのだろうか。そして、クリトンはどのような心持ちでそれを聞くのだろうか。この思考実験のなかでの対話の開始時点で、理由  $x$  を保持しているのはソクラテスだけであるので、心持ち  $\beta$  により、ソクラテスだけが、クリトンが死ぬというこの状況  $y^*$  に直面して平生としていられることになる。クリトンは、やはりクリトンであるため、「眠れないほど辛い境遇にいる」我が身を嘆き、面会に来たソクラテスに、『クリトン』篇で語ったさまざまな理由を挙げていかに脱獄することが正しいことかを語り、脱獄の手助けを頼むだろう。そして最後には、「もう余計なことは言わない。何でもいいから、ソクラテス、ぼくの言うとおりにしてくれ。いやだなんて、どうか、言わないでくれ」と懇願することだろう（『クリトン』46a）。しかし、ソクラテスは、嘆き助けを求めるクリトンに向き合いながらも、次のように言うことだろう。

おお、愛するクリトン、きみの熱意は、大いに尊重しなければならない、もし何か正しさを伴っているとすればね。しかしそうでないと、それは大きければ大きいだけ、いっそう厄介なことになる。だから、きみの言うようなことを、なすべきか否か、ぼくたちはしらべて見なければならぬ。というのは、ぼくという人間は、自分でよく考えてみて、結論として、これが最上だということが明らかになったものでなければ、ぼくのうちの他の〔感情や欲望などの〕いかなるものにも従わないような人間なのであって、これは今に始まったことではなくて、いつもそうなのだ。だから、今までにぼくが言っていた結論〔あるいは結論ずみの諸原則〕を、ぼくがこういうまわり合せになったからといって、今さら放棄することはできないのだ。〔…〕だから、もしわれわれが、これまでに言われたこと以上に、もっとすぐれたことを、今この場で言うことができなければ、いいかね、きみ、ぼくは決してきみに譲歩しないだろう。(『クリトン』 46b-c)

そして、『クリトン』篇での対話から推察すれば、この思考実験内の対話においても、結果的には、ソクラテスが譲歩することはないだろう。ソクラテスは、平生を保ち、終始穏やかな態度を保ったまま、『クリトン』篇で論じた理由  $x$  を提示しながら、クリトンに死ぬよう説得することだろう<sup>11</sup>。先に引用した『パイドン』でのソクラテスの態度にも言葉にもあらわれた幸福そうな様子が、「無実なのに死にたくない」と涙ながらに訴えるクリトンと対峙したその瞬間にも確認することができることだろう。なぜなら、ソクラテスは理由  $x$  を保持しているからである。

### 3. 二人のソクラテス

前節の思考実験で描かれたもう一人のソクラテスは、一人目の、あの偉大なるソクラテスと重要な点で何か異なるところがあるだろうか。二人のソクラテスの間に考え方の違いはなく、また行動は一貫してその考え方に基づいたものであり、一貫性がある。そうであれば、二人目のソクラテスもまた同様に偉大なはずではないだろうか。二人目のソクラテスに何か違和感を感じるとすれば、それは、私たちが偉大だとしていたソクラテスの思想に

---

<sup>11</sup> 『クリトン』篇では、ソクラテスが自ら進んでアテナイの法に従うという同意をほかの誰よりも強く示している事が、70年の人生のなかでソクラテスがアテナイからほとんど出ることなくアテナイの法に満足してきたことや、裁判においては国外追放を合法的に選べたのにそれを選ばなかったことなど、ソクラテス個人に固有に当てはまりうる特徴を挙げながら、述べられている(52a-53a)。こうしたソクラテスに固有の事情が、主張  $\alpha$  にとって本質的な基盤となっている(つまり理由  $x$  において中心的役割を担っている)のだと考える場合、状況  $y^*$  は状況  $y$  とは、重要な点で異なることになり、主張  $\alpha^*$  は導かれないことになる。しかし、それは裏を返せば、『クリトン』篇でのソクラテスの主張を、ソクラテスのような人にもみ当てはまる限定的な主張とみなすことである。

ついて何か考え違いをしていた可能性がある<sup>12</sup>。そうした考え違いが取り除かれた場合の行き着く先は二つある。一つは、ソクラテスの思想を正しく理解した上でなお彼を偉大だと考えるというものであり、もう一つは、その偉大さは幾分目減りする、というものである。

どちらの着地点にとっても重要なことは、死んだのは、或る意味では、たまたまソクラテスであっただけで、『ソクラテスの弁明』『クリトン』『パイドン』などで自らの死に際して語る彼の思想は、死ぬのが他の誰かであっても通用するものだったということである。その意味で、ソクラテス個人が「無知を自覚している者が知者である」の例化でしかないと彼が述べているのと同じ意味に於いて（『ソクラテスの弁明』23a-b）、主張 $\alpha$ によって実際に死んだのがソクラテスだったことは主張 $\alpha$ の例化でしかないのである。ここから言えることは、ソクラテスにとっての問答（哲学対話）は、たとえ無実の罪で投獄された親友が生きることを懇願してもなお、死ぬことが正しいと考えた場合には、親友の言葉や様子によって惹起される情動的反応や逡巡を一考だにすることなく、死ぬよう説得するような、非常に過酷な営みだということになる。

この過酷さを否定的に捉えた場合、第二の方向に行き着く。そこでは、彼の問答の過酷さ自体が評価されたのではなく、その過酷さにとっては偶然的な事実、つまり死んだのがたまたまソクラテスであったことが、ソクラテスの偉大さに寄与していたと理解される。これは、ソクラテスの偉大さは道徳的な運という外的な要因に拠る部分があったと考えることである。それゆえ、思考実験を通じて示された外的要因の分だけ、ソクラテス本人に帰せられる偉大さは目減りすることになる。

他方、この過酷さを肯定的に捉えた場合、第一の方向に行き着く。死んだのはたまたまソクラテスであったが、彼は自らの考え方に基づいて生き、そして死んでいったからである。

しかし、この彼の偉大さは或る種の当惑をも引き起こさないだろうか。ソクラテス自身が「教師」を名乗ったことは一度もないにしても、彼の問答・哲学対話が（人を善くするための営みという意味で）教育的な営みであったことは明らかである。ソクラテスが示した哲学対話は、もっぱら理知的に考察することを通じて、善く生きるよう人の生き方を変えるものであるが、それゆえまた、理詰めの結果死ぬことが望ましい場合には、実際に死ぬよう促すものでさえある。哲学対話が「実際に死を勧める」ほどに過酷な営みであるとすれば、現代の哲学教育に携わるわれわれにとって、彼の哲学対話による哲学教育は戸惑いを隠せないものとなるのではないだろうか。

---

<sup>12</sup> ここでは、立花の議論が致命的に間違っていたという可能性を、私が執筆者本人であるという理由から、不遜にも除いている。

## 参考文献

アリストテレス『新版アリストテレス全集』全 20 巻、岩波書店、2013 年～刊行中。

Mackie, J. 1977. *Ethics: Inventing right and wrong*. Penguin Books. (ジョン・マッキー『倫理学：道徳を創造する』加藤尚武監訳、哲書房、1990 年。)

納富信留『プラトンとの哲学：対話篇を読む』岩波新書、2015 年。

納富信留『哲学の誕生：ソクラテスとは何者か』ちくま学芸文庫、2017 年。

荻野弘之「対話と思考——誰を相手に、何を語るのか？」、『哲学科紀要』第 42 号、2016 年、1～26 頁。

プラトン『プラトン全集』全 16 巻、岩波書店、1974 年～1978 年。

柴田隆行「井上円了とソクラテス」、『井上円了センター年報』第 22 号、2013 年、3～22 頁。

高橋久一郎「ソクラテスと国家」、『創文』、第 323 号、1991 年、10～14 頁。

クセノポン（クセノフォン）『ソクラテス言行録 I (ソクラテスの思い出)』内山勝利翻訳、京都大学学術出版会、2011 年。